NEWSLETTER MAY 2022

SEED 第23号

School for Excellence in Educational Development

創価大学学士課程教育機構ニュースレター

CONTENTS

巻頭言 「新しいカリキュラムのスタートに向けて」 教務部長 西浦昭雄……1
［WLC］ WLCの取り組み……2-3
［GCP］ GCPの取り組み……4
［SPACe］ 2021年度秋学期についてのご報告……5-6
［CETL］ CETLの取り組み…… 7-8
新任教職員紹介……8

新しいカリキュラムのスタートに向けて

教務部長 西浦昭雄

本年度より共通科目と看護学部専門科目の新たなカリキュラムがスタートしました。来年度には他の7学部専門科目が新カリキュラムになる予定で、その編成の大詰め段階に入っています。当初、大幅なカリキュラム変更は2025年頃に予定していました。しかし、急速な社会情勢の変化やAI・データサインエス教育をめぐる社会的ニーズの高まり、本学の新しいグランドデザインであるSoka University Grand Design 2021-2030の動き等を踏まえて検討を重ね、最終的には2020年12月開催の内部質保証推進委員会にて、カリキュラム改正の時期を早めることで決定しました。私は2016年度から教務部長として一連のプロセスにかかわってきたこともあり、ここでは共通科目の新カリキュラムの狙いを中心に、その後の展望を含めて紹介します。

本学は、共通科目の教育理念・目標を踏まえ、所属学部にかかわりなく幅広い教養を身につけることをめざし、2009年度より共通科目に「創価コアプログラム」を導入しました。2022 年度カリキュラムより対象科目を、（1）基礎科目の「初年次セミナー」「学術文章作法」、（2）大学科目、（3）言語科目、（4）世界市民教育科目、（5）「データサイエンス入門」に変更します。

新たなカリキュラムの第1の特徴は、データサイエンス教育の充実です。今回のカリキュラム改正から共通科目に「数理・データサイエンス・自然科目群」を設けます。さらに、全学部の学生が必修科目として1年次に「データサイエンス入門」（2単位）を学びます。ここでは英語と日本語で教えるクラスを用意し、反転授業や学生によるピアサポートを全面的に取り入れます。また、本学は2019年度より「副専攻：データサイエンス」を開始し、認定要件（単位数、通算GPA）を満たせば成績証明書及び卒業証明書に記載するようにしています。その実績もあり、昨年度に文部科学省が推進する「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」の第1回選定の11校の一つとして認定されました。理工学部情報システム工学科がある強みをいかし、文系の学生であってもデータサインエスを学べるように学修ステップを示し、入門レベルからデータを活用した演習レベルまで学生が段階的に学んでいけるような仕組みをつくっています。

第2の特徴は、世界市民を育む科目の体系化です。2014年度に採択された文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援」事業において、本学は「人間教育の世界的拠点の構築」をめざし、「創造的世界市民」の育成に努めることを公約しました。2016年度に見直したディプロマ・ポリシーでは本学がこれまで取り組んできた「創造的世界市民の育成」にあたって身につけるべきものとして「国際性」「創造性」など4つの要素を掲げました。その意味からすれば、世界市民の育成は共通科目のみならず専門科目、さらには課外活動まで含めた取り組みになりますが、本学に入学した全ての学生が履修できる基礎科目として、2018年度から共通科目に「世界市民教育科目群」を設け、選択必修化しました。新グランドデザインでは「価値創造を実践する『世界市民』を育む大学」を掲げています。本年度より世界市民教育科目群を「平和・人権・環境・開発」と「サービスラーニング・リーダーシップ科目」に分けて学生の履修に役立てるようにしました。今年度中には、新しい各学部の専門科目とあわせて世界市民教育という観点から整理したカリキュラムマップを作成する予定で準備を始めています。

第3の特徴は、SDGsを推進する教育の展開です。本学は2019年度にSDGs推進センターを設置し、全学をあげて取り組んでいます、今年度のシラバスより、全ての科目を対象にSDGs17項目との関連性について記載しています。例えば、私が担当する経済学部「アフリカ経済論」では、SDGs「目標1　貧困をなくそう」「目標2　飢餓をゼロ」等が関連します。シラバスで記載することで学生がSDGsとの結びつきが強い科目を知ることができます。今後はSDGsに関連する科目を充実させるとともに、それらをカリキュラムマップとして整理し、学生が計画的に履修できるようにしていきます。さらに、明年度からのSDGs副専攻化を考えており、各学部代表者からなるワーキング・グループで検討を進めていくことになっています。

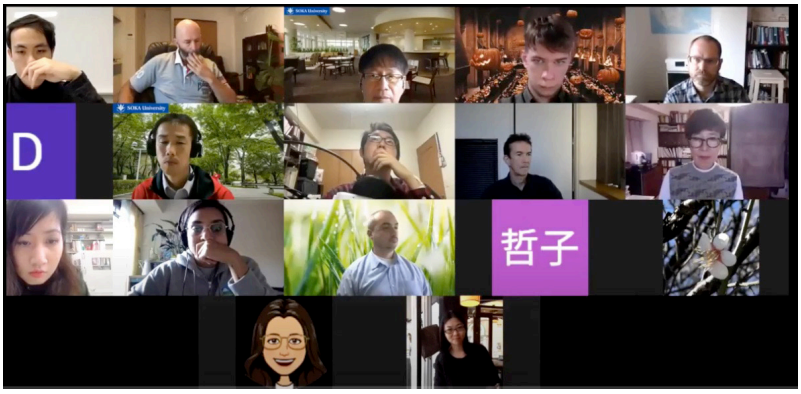
カリキュラムを変更すれば学生の学びが深まるという単純なものではありません。教員がディプロマ・ポリシーやラーニング・アウトカムズ（学習成果）の中で自身の科目がどのような位置づけにあるかを意識して授業を実施するとともに、学生自身もディプロマ・ポリシーやラーニング・アウトカムズを理解し、それらを実際に身につけていくことが求められます。本学が掲げる「Discover your potential　自分力の発見」を体現する教育をさらに探究していきます。

共通科目英語科目Englishでの新たな取り組み

English I/II 初級レベル

共通科目英語科目Englishにおける新方式の試みは、これまで1年生用科目のEnglish I/IIの基礎レベルに限られていたが、2021年度から一つ上の初級レベルでも展開することとなり、その準備のため教員研修が開始された。研修の主な対象者は初級レベルを担当する若手の助教である。それを副センター長、コーディネーター等の教員が支える形式を取っている。研修では、尾崎センター長を中心にヒューマニスティックアプローチについて研鑽している。2021年度は、6月11日、2月16日、3月23日の3回、すべてオンラインで行われた。これらの研修をとおし、学習者は批判的思考力のような認知能力だけでなく、内発的動機づけ、共感力、グリット、レジリエンスなどの非認知能力も備えていることをあらためて意識し、学習者をホリスティックに捉えることを学んでいる。そこから英語科目ではどのように教育学習活動を計画していくことが望ましいか、議論を重ねている。現在、話題のほぼすべてがヒューマニスティックアプローチの理論についてであるが、2022年度はヒューマニスティックアプローチに基づく教室内外での具体的な実践に焦点を移していく予定である。

具体的な展開として、学習者が英語で自分自身の思いを表現していくことのできる活動形態を取ることが考えられる。これは、すでにある何かしらの言語資料を正しく再現できることを求めるのではない。その場合は正解が存在し、どれだけその正解に近づけることができるかが問われる。それに対し、自分自身がどう思うかに正解はなく、むしろ人と違う意見を持つことの方が大事になる。その中で、違う意見に接しそれを受け入れ、必要であれば自分の考えを修正することを促す。こうした英語による対話を通して自分と他者の理解を経て相互に変容を図ることを目指す。この環境を教室内に作り出すため、教員の創意工夫が求められるが、助教を含めWLCの英語教員には物語や詩、或いは劇など、学習者の違った反応を引き出す素材を使って授業を行える教員がいる。まず彼らが実践を開始し、教員同士相互に学び合いながら、初級レベルの新方式を充実させていくこととなる。なお、それより上のレベルの上級者に対しては、プロジェクト推進型授業の導入を模索している。いずれにしても、ヒューマニスティックアプローチの教育学習観に立ち、それを土壌として、学生が英語の学習を通して、言語の知識やスキルを身につけながら、同時に人間性も伸ばし自身の可能性を最大に開花させてほしいと願っている。



English III/IV 基礎レベル

Englishの新方式はEnglish I/II基礎レベルにおいてComputer-based Testing（CBT）の開発、運用を皮切りに開始された。それに続き、2021年度は2年生の英語科目English III/IV 基礎レベルにおいても新たな方法を試行した。

English III/IV 基礎レベルにおける新方式開始のきっかけは大きく二つあった。第一に2020年度より学習者の自律性を専門とするアンドリュー・トゥイード講師を迎えたことである。第二に2020年度秋学期にトゥイード講師の尽力により、文教大学准教授スティーブ・フクダ氏を講師に招き、Guided Autonomous Syllabus（GAS：支援付き自律性育成シラバス）について研修会を開いたことである。トゥイード講師は、自身の経験とフクダ氏のGASを統合しEnglish III/IV 基礎レベルの新方式を開発した。

新方式のEnglish III/IV 基礎レベルでは、学生が明確な目標を設定し、入念な計画を立て、学期を通して自律学習を行えるようにする。教師はこれらの全段階において学生に指導を行う。振り返り、自己評価活動もこの授業において強調される。このような方法で各学生の言語発達、自律学習、生涯学習を促す。学生は、心理学や言語学習についての文献を英語で読むことを通し、ゴール設定、モチベーション、成長マインドセットといった心理学や言語学習の重要な概念に関し理解を深める。

指導方法としては、Content Language Integrated Learning（CLIL：内容言語統合型学習）を取り入れている。このアプローチでは、学生が英語で教材を読み、それらを理解した上で、授業内外の自律学習にその学びを実践に移す。その中で学生は、利用した教材、習得したスキル、学習方法に関して短いプレゼンテーションを英語で行い、互いの経験や気づきを共有する。この経験を積み重ねることで、English III/IV 基礎レベルを終えた後も英語学習を自律的に継続していくことが期待される。

新方式のEnglish III/IV　基礎レベルは2021年度、トゥイード講師のクラスにおいてのみ開始した。自律性の育成を重んじ

たため、主導権の多くを学生に委ねた結果、春学期末のアンケートに「もう少し教師主導の時間も増やしてほしい」という要望が出たこともあった。この点に、学生の方も自律を求められてもすぐには対応できないという実態が感じとられた。トゥイード講師は即座に反応し、学生主導と教師主導の活動のバランスをうまく取りながら進めている。当初はトゥイード講師一人のみの実践であったが、2022年度は新規に二人の教員が加わり、新方式の発展に尽力する予定である。教員の増員により新たなアイディアが加わり、本方式がさらに発展することが期待される。

プロフェッショナル・ディベロップメント（PD）

2021年度秋学期WLCでは、多くのPDセッションを持った。話題は多岐にわたったが、中心にはWLC第2ステージプロジェクトに関わる以下のトピックがあった。

①ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）とカリキュラム

②ヒューマニスティック・アプローチ

①については、ランドル副センター長を中心に10月28日、11月25日、12月2日に行われ、CEFRにある標準的Can-doステイトメントを本学の共通科目英語科目の実状に沿うように修正する方法を振り返った。その上で、修正したステイトメントをどのようにシラバスに表示し、実際の授業内活動で実現していくかを学んだ。

②においては、目下共通科目英語科目English I/II 初級レベルで実施を予定しており、主な担当者となる助教を対象とし12月16日、3月23日の2回、尾崎センター長を中心に行った。これらのセッションで本学WLCの英語科目の中で育成を目指す人間性を確認し、言語的目標と言語以外の目標は同時に達成すべきことを確認した。

これら以外にも指導法や情意要因に関わるセッションが行われた。10月2日にマメ助教とドネリ准教授は春学期に続き、M-Reader（多読管理用ソフト）のより高度な使い方や、いかに効果的に学生にその魅力を伝えることができるかなどについて説明した。

10月20日にはトゥイード講師が、学生が自律した学習者に成長するために、教師はどのような支援ができるかについて語った。トゥイード講師は教室の内外で学生が自分の学習を律するための実践的な方法を紹介した。参加者はトゥイード講師により提案されたアイディアやテクニックを自分たちの授業でどう実践すればよいか議論する機会を得た。

10月27日には本学大学院国際言語教育専攻英語教育専修の招聘教員であるウィリー・アーディアン・レナンディア教授（南洋理工大学）を講師にお招きし、多読・多聴について研究の最新の動向や、指導法、教育現場で実施する際の具体的なヒント等を教えていただいた。レナンディア教授は11月17日にもグローバル・コア・センター主催の教員研修の講師を務められた。そこでは、教員が教育、研究、社会活動に継続的に従事し、成果を上げ内外にインパクトを与えていくことの意義について学ぶことができた。英語教育分野の第一人者に接する機会を多く得ていることは、WLCの英語教員にとり、幸運なことである。

この他にも、11月10日にダン哲子、冨田浩起両講師がオンライン授業の実施を余儀なくされた2020年度、学生の自律に関する教員の捉え方がどのように変化したかについて報告した。11月17日にはスナイダー教授が教室内で教師が発する効果的な質問の特質について発表した。参加者はスナイダー教授の手助けを得ながら、実際に質問を作成する体験をした。

2021年度秋学期は一段と助教の報告が多かった。12月10日にフランシス、大村、カールータ各助教が講師となりそれぞれ以下について発表した。フランシス助教は、英語リスニングジャーナルの実施方法とその効果、大村助教はヨーロッパ言語ポートフォリオの実践と学習者の自律、カールータ助教は教科書や活動を多面的に補足できるGoogle Arts & Cultureを紹介した。若手の台頭が著しく感じられた2021年度秋学期であったとも言える。ともあれ、教員同士で先端的な研究成果から、日々の授業実践に直結する話題まで多岐にわたり学ぶWLCのPDセッションは今学期も盛況であった。

■WLC　教員の紹介　　ジェイミ・パードン講師

英国出身のジェイミ・パードン講師はアストン大学にて修士号（英語教授法）を取得した後、東京で30年以上英語教育に携わっている。現在は本学経営学部英語科目 Study Skills for Business、工学部英語科目 English Communication for Science、English for Science and Engineeringを教えている。研究分野は自律学習やコンピュータを活用した英語コミュニケーションである。現在、日本在住の研究者と英語のオンライン・チャット・セッションの有効性を高める目的で研究を行なっている。このオンライン・チャット・セッションは東京都内の大学のセルフ・アクセス・センターにおいて交換留学生が主催し、専任教員が管理を行なっている。また、WLCにおいてはグローバル・レクチャー・シリーズ（GLS）の責任者を務めている。2021年7月には、ケンブリッジ大学教育学部のヒラリー・クレミン博士を招き、最終的には100名以上の学生・教職員が出席した大成功のオンライン講演会を開催した。

グローバルシティズンシッププログラム
ディレクター　佐々木　諭

第11回成果報告会・タマサート大学オンライン研修を開催

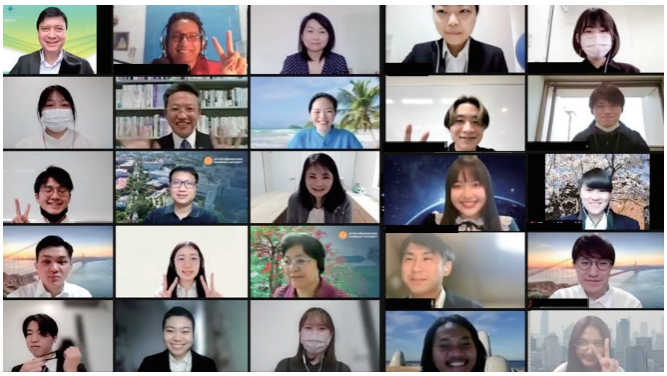
2021年12月11日（土）、グローバル・シティズンシップ・プログラム（GCP）の第11回成果報告会が開催されました。成果報告会は、2年次授業のプログラムゼミⅣの授業において取り組んだ地球的課題に対して、学生の視点から取り組める具体的な提案を発表することを目的としています。

今回は11期生の30名が５つのグループに分かれ、環境、教育、災害、多様性などに関する課題に対して解決策を発表しました。

コメンテーターとしてオンラインで参加頂いた北野尚宏教授（早稲田大学、元JICA研究所所長）は、「皆さんの発表は、グローバルな視点から日本の地域のローカルな課題や経験を捉えなおし、これからの社会で求められる新しい変化に適応した企画を提案されたもの」と評価され、「目の前の困難を抱えているひとりに向き合い、日本また世界で活躍されることを念願しております」とGCP生への期待を述べられました。

また、2022年2月15日には、タイ・タマサート大学との連携により、GCP生が成果報告会の内容を英語で発表を行うオンライン研修を開催しました。

研修には、タマサート大学教養学部のパーサポン・シーピジャーン学部長をはじめ多くの教員・学生らが参加されました。研修では、GCP生とタマサート大学生が発表し、発表に対して、教員・学生らと活発なディスカッションが行われました。今回の研修は、GCPとタマサート大学との友好を深める有意義な機会となり、今後の一層の交流が期待されます。



第9回GCP修了式を開催

2022年3月17日（木）には第9回GCP修了式が開催され、8期生21名、9期生21名の計42名がGCPを修了しました。修了式には、馬場善久前学長、田代康則理事長らが出席し、新たな出発を祝福しました。

今年度修了したGCP生8期生、9期生は、コロナ禍の影響により、留学の途中帰国や派遣中止など、キャリアプランの変更を余儀なくされることもありましたが、国内外の大学院進学、国際的な優良企業への就職、公務員採用試験の合格など、顕著な進路結果を勝ち取りました。

修了生を代表して、大手通信企業に就職する谷梅花さん（GCP8期生・経済学部卒業）と、東京大学大学院新領域創成科学研究科に進学する笹川大輔さん（GCP9期生経済学部卒業）が代表挨拶を行いました。

谷さんは、GCPは「人生に大きな影響を与え、学びも数えきれないほどありました。その中でも特に得たことは、可能性を信じ挑戦を続ける粘り強さ、世界のために貢献したいとの強い思いを持つ仲間の存在の大きさです」とGCPの学びを振り返り、「感謝を胸に、誠実な行動と努力で信頼を勝ち取り、グローバルリーダーに成長していきます」と抱負を語りました。

笹川さんは、1年次に参加したフィリピンでのGCP海外研修を機に、「貧国の根絶に貢献する」との目標を立て、「英知を磨くは何のため　君よそれを忘るるな」との指針を胸に、徹して勉学に挑戦し大学院に合格しました。卒業後は「開発経済学を学び目標を果たしていきます」と決意を述べました。

馬場前学長、田代理事長は、GCPの修了を祝福し、修了生全員が卒業後も世界市民として活躍されるよう期待を述べました。

創価大学ラーニング・コモンズ「SPACe」総合学習支援センター

2021年度秋学期についてのご報告

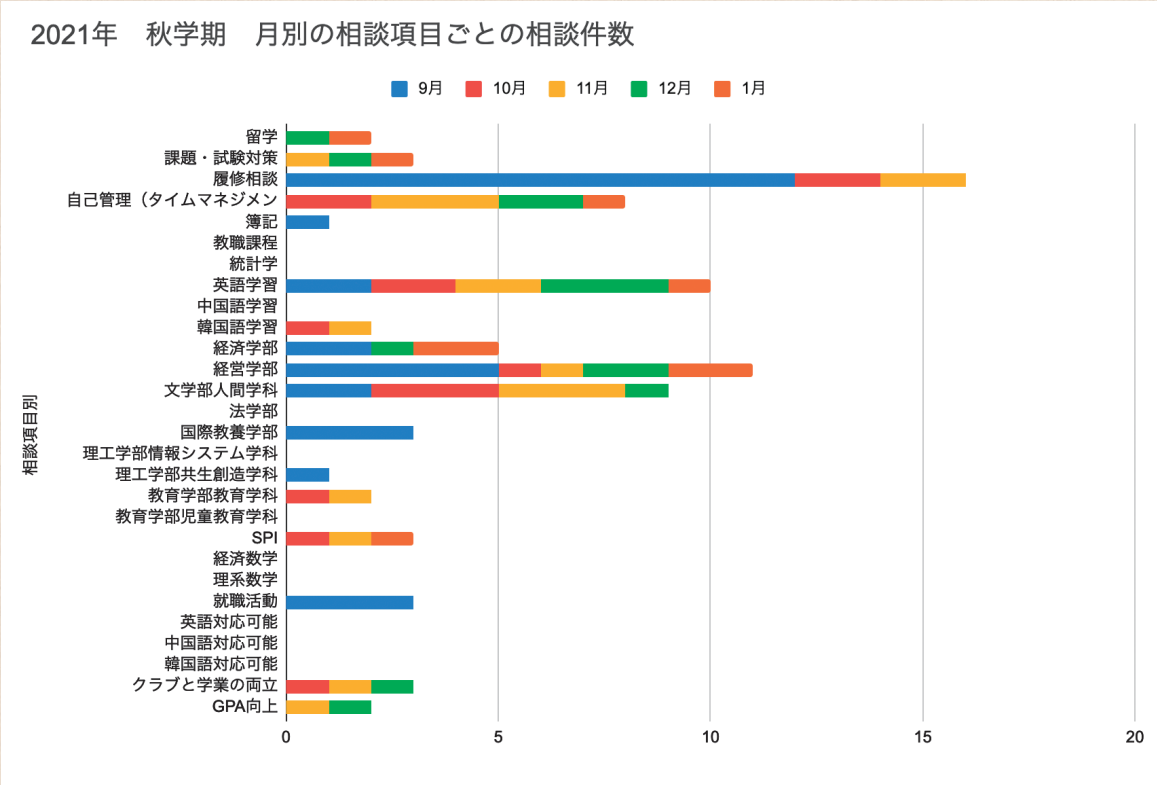
2021年度秋学期も新型コロナウイルス感染防止のため、オンラインを主体に、一部対面も交えながらサービスを行いました。ここでは秋学期のSPACeの取り組みについてご報告します。

ヘルプデスク

ヘルプデスクでは、学期の途中で対面授業に移行する科目が増えたことから、オンラインでのサービスの他に、対面での学習相談も再開しました。また、春学期に引き続き、予約以外に飛び入りによる学習相談も実施しました。秋学期に入り学生が大学生活に慣れてきたためか、学習相談の利用者数は45件、前年比0.93と昨年度よりも若干減少しました（表1）。相談内容の内訳を見ると、学期始めの履修相談が最も多く、次いで学部の授業に関わる学習相談や英語学習、自己管理に関する学習相談が多いことが分かりました（図1）。これらの利用者のニーズに対応するために、秋学期にはGPA向上や試験対策、タイムマネジメントや長期休みの過ごし方などの学習セミナーを実施しました（表2）。加えて、秋学期には15名が、学期にわたって継続的に学習相談を行うピア・サポートを利用しました。利用者アンケートからは「1週間の振り返りと次回の目標を作る習慣ができた。自分を褒めてあげる習慣がなく、自己肯定感が下がりがちだったが、小さなことでも自分を褒めることを学んだ。」というように、ピア・サポートによりセルフマネジメント力を高めている様子が見られました。

■表1　2021年度秋学期　HELP DESK 学習相談利用者（人）

2021秋学期	9月	10月	11月	12月	1月	計	2020秋学期	前年比
予約	8	5	7	5	2	27	45	0.93
飛び入り	7	1	2	3	2	15		
計	15	6	9	8	4	42		



■図1　2021年度秋学期　相談項目ごとの相談件数

■表2　HELP DESK 学習セミナー

セミナー	実施日
ICTセミナー	10月　1日
ストレスマネジメントセミナー	10月29日
TOEICセミナー	11月17日
GPA向上セミナー	11月19日
タイムマネジメントセミナー	11月24日
試験対策セミナー	12月　3日
睡眠セミナー	12月　8日
読書セミナー	12月10日
長期休みの過ごし方セミナー	1月12日

日本語ライティングセンター

日本語ライティングセンター（JWC）では、春学期に引き続きオンラインでサービスを行いました。レポートチュータリングの利用件数は212件で前年比1.24、レポート診断は254件で前年比1.68の利用がありました（表3）。特に、レポート診断が急増し、レポートチュータリングを上回りました。レポート診断は昼夜を問わずオンラインのみで利用できる利便性が、学習者のニーズとあっているようです。また、ライティングのプロセスではチュータリング利用し、書き上げたレポートはレポート診断を利用するなど、用途を分けて利用している様子も窺えました。

学習セミナーとしては文献検索、マインドマップ、質問力向上などのライティングのプロセスを支援するセミナーの他に、表現力を養うために東京富士美術館と連携して対話型鑑賞のセミナーも開かれました（表4）。また、書くことは読むことでもあることから、JWC図書館連携イベントとして、アクティブ・ブック・ダイアログなども開かれました。

■表3　2021年度秋学期　JWC利用者

2021秋学期	9月	10月	11月	12月	1月	計	2020秋学期	前年比
レポートチュータリング	0	58	85	44	25	212	171	1.24
レポート診断	0	36	56	119	43	254	151	1.68
計	0	94	141	163	68	466	322	

■表4　2021年度秋学期　JWC学習セミナー

セミナー	実施日	参加者（人）
文献検索いろはのい	9月29日	17
文献検索いろはのろ	10月　5日	10
質問力向上セミナー	10月19日	23
レポートの表現	10月20日	9
レポートお助け隊	10月27日	15
マインドマップセミナー	11月　2日	5
文献探索いろはのは	11月　9日	8
レポート構成をプレゼンに応用する	12月　1日	3
対話型鑑賞（美術館連携）	12月　8日	8
レポートお助け隊	12月15日	11
計		109

■表5　2021年度秋学期　JWC図書館連携イベント

セミナー	実施日	参加者（人）
「万葉集を散歩する」武蔵国篇	10月29日	15
この本を推したい！！！	11月12日	26
読書会アクティブ・ブック・ダイアローグ『新訳“自分らしさ”を愛せますか』	11月17日	11
オンライン読書会アクティブ・ブック・ダイアローグ『ケーキの切れない非行少年達』	1月28日	13
計		65

調べごと相談

「SPACe調べごと相談（レファレンス）」では、レポートや卒論の参考文献検索、データベースの利用方法、その他の調べごと等の相談に応じるレファレンスサービスを行っています。

（対面とWeb会議システムは、週3日・一日3時間在席／メールは平日に対応）

2021年度も「オンライン（Web会議システム、メール）」による回答を行い、秋学期の途中より「対面」による回答も再開しました。質問方法の選択肢を増やしたこともあり、質問件数は2020年度と比較して年間で21増加しました。さらに、コロナ禍の前の2019年度と比較しても年間で20増加しました。

今後も社会状況や学内の状況を踏まえて適したサービス体制を検討し実施していく予定です。

（下表は2021年度・秋学期のみの数値になります）

■SPACe調べごと相談（レファレンス）質問件数／2021年度・秋学期

	9月	10月	11月	12月	1月	秋学期	%
学術文章作法	0	7	8	14	2	31	53%
演習（卒論）	2	1	6	3	1	13	22%
その他	1	4	4	3	3	15	25%
	3	12	18	20	6	59（40）	

（　）は昨年度

CETL
教育・学習支援センター

https://www.soka.ac.jp/cetl/

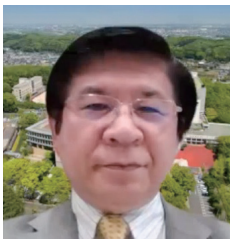
CETLは学士課程教育機構の教育支援組織として、FD/SD委員会や教務課と連携して様々なFDイベントを企画・運営しています。以下、2021年度下半期の活動報告です。

2021年度　教育フォーラム（FD・SDフォーラム）

10月16日（土）に第8回創価大学教育フォーラム（第19回FD・SDフォーラム）がオンラインで開催され、学内外より大学関係者や高等学校教員、学生ら184名が参加しました。

フォーラムでは、馬場善久学長の挨拶の後、関田一彦副学長（教育・学習支援センター［CETL］長）が、フォーラムに先立ち学内関係者を対象に開催した学部別FD分科会の概要を報告しました。続いて「自己点検評価の学生参画の在り方について」と題して、鈴木将史副学長（全学自己点検・評価委員長）が本学の自己点検評価の学生参画の歴史や、取り組み、今後の展望などを紹介しました。

関田一彦副学長


鈴木将史副学長（現学長）

その後、立命館大学 教育開発推進機構 教授／教育・学修支援センター副センター長の沖 裕貴氏が、「大学における自己点検評価と学生参画」と題して基調講演しました。沖氏は、大学において内部質保証や教学マネジメントが重要とされる背景や、その位置づけ、方法論などの概要を述べました。また、評価に直結する教育・到達目標の設定の仕方やそこで述べられる事項を反映した形でのシラバス作成の注意点など具体的な話題にも言及しました。

立命館大学　沖 裕貴教授

さらに、質保証における学生参画については、［学習・教育評価］、［カリキュラム設計と教育診断］、［教科ベースの研究と探求］、［教育と学習の学識］の4つの分野での国内外の学生参画の在り方について様々な事例を紹介しました。

そして、「アセスメントのチェックは、機関、プログラム、科目などの各階層でそれぞれエビデンスを示しながら、ディプロマ・ポリシーを意識してその整合性や体系性、系統性を示せる取り組みになっていることが重要であり、（中略）質保証における学生参画は世界的に見ても基本の取り組みになっている。今後も更にその積極的な充実が求められる」と述べました。

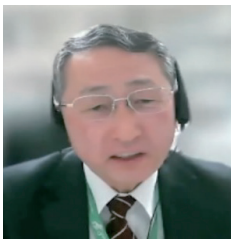
参加者からは「授業を運営するうえで、評価表の基準やルーブリックの策定などに向けてヒントを得られた。シラバス作成の際に役立てていきたい」、「学生参加によるカリキュラム検討が行われている大学の例を知ることができ、とても参考になった」、「自己点検と学生参画について、具体的な項目や実例を通して、認識を深めることができ、非常に啓発された貴重な機会となった」などの声が寄せられました。

2021年度　学士課程教育機構FD・SDセミナー

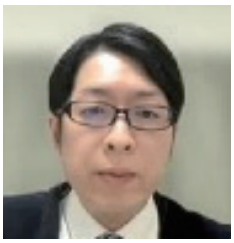
●第4回FD・SDセミナー（Zoomによるオンライン開催）

2021年11月19日（金）、CETLの関田一彦センター長、学士課程教育機構の佐藤広子 准教授、教育学部の戸田大樹 准教授の3名に講師をご担当いただき、学内外の教職員を対象に2021年度第4回学士課程教育機構FD・SDセミナー開催いたしました。

冒頭、「創価大学の文章力向上の取り組み概要」と題して、関田センター長より、開会あいさつとセミナーの開催趣旨説明がありました。続いて佐藤広子准教授より、「学術文章作法Ⅰを中心とした文章力向上プログラムの取り組み」についてご講演いただきました。文章力向上プログラムの位置づけや特長、Feedback Studioを活用した実際の授業の運営方法、また日本語ライティングセンターによる課外サポートの取り組み、それらを通じて得られた成果などについて共有されました。戸田大樹准教授からは、学部の初年次セミナー科目の授業におけるエビデンスに基づいた文章力改善の取り組みをお話いただきました。また、学士課程教育機構の羽賀文湖講師よりキャリアの観点から文章力の重要性に関してコメントがあり、最後に田中副学長より閉会の挨拶がありました。


関田CETLセンター長

佐藤広子准教授


戸田大樹准教授

様々な視点からの文章力向上の取り組みについて参加者にとって多くの有益な情報が得られたことが伺えました。

58名（本学教職員）の方に参加いただき、アンケートには、「ジュニアペーパーの位置づけや目的、またどのように活用すればよいのかを学ぶことができました。」「学術文章作法の講義の到達目標がとても明快だと感じた。自学部での取り組みにおいても、より読み手に伝わりやすい文章が書けるようにかかわっていきたい。」「本日の内容を今後の自分の授業やゼミでのレポート、論文作成の指導につなげていきたい。」等の声が寄せられました。

●第5回FD・SDセミナー（Zoomによるオンライン開催）

2022年2月21日（月）、熊本大学 教授システム学専攻 教授の鈴木克明氏に講師をご担当いただき、2021年度第5回学士課程教育機構FD・SDセミナーを開催いたしました。

熊本大学　鈴木克明教授

「インストラクショナルデザイン（ID）入門」と題して、インストラクショナルデザイン（ID）とは何か、認知的発達を促す授業の方法や、評価と単位認定を見直すための提案、学習目標を高度化する方法等について、オンライン開催でしたが双方向性のある講演となりました。

授業や研修を効果的に行うための考え方やポイントを、チャット機能やブレイクアウトルーム、同時入力可能な共有のワークシートなどを使いながら、参加者からの質問に回答するという形で双方向にセミナーが進められました。参加者も受け身にならず、講師のセミナーの進め方そのものからインストラクショナルデザインの考え方を実際に体感している様子が伺えました。

40名（本学教職員）の方に参加いただき、アンケートには、「学生の主体的学びの促進について考えさせられる貴重な研修でした。様々な便利なツールを目的達成のために少しずつ取り入れて試してみたいと思いました。」「授業をしっかり振り返ることができる内容でした。講師の先生の進め方そのものが大変参考になりました。」等の声が寄せられました。

2021年度　FD・SD研修会

●CETL勉強会：CHiBi-CHiLOに関するワークショップ（Zoomによるオンライン開催）

2021年9月18日に、NPO法人CCC-TIES 附置研究所 主任研究員の堀 真寿美講師にご担当いただき、CHiBi-CHiLOに関するワークショップを開催いたしました。

冒頭、関田一彦CETLセンター長より開会あいさつがあり、ワークショップの趣旨説明がされました。 堀講師からは、CHiBi-CHiLO を提供するNPO法人CCC-TIES の紹介、CHiLO Bookからの変更点やCHiBi-CHiLOのシステムの概要や使い方などをデモンストレーションを交え、ご講演いただきました。

オープンソースCHiBi-CHiLOを利用して作成したコンテンツの特徴として、再利用性の高さや、学習者の集中力などに配慮した構造、また様々なLMS（Learning Management System）との連携が可能な点、今後新たに追加される機能などお話いただきました。活発な質疑応答が行われ、参加者にとって多くの有益な情報が得られたことが伺えました。

38名（本学教員）の方に参加いただき、アンケートには、「現在学内で継続的に蓄積されている講義ビデオの活用法を学ぶことができ有意義な学びの機会となった。学生の負荷を上げずに楽しい講義ができるようにしていきたい。」「今後急速に変化する大学の学修の示し方の方向性を学ぶことができました。」等の声が寄せられました。

●ファカルティ・ディベロッパー研修（Zoomによるオンライン開催）

愛媛大学　中井俊樹教授

2021年9月4日・5日の2日間で、愛媛大学 教育・学習支援機構教育企画室の中井俊樹教授、竹中喜一講師にご担当いただき、ファカルティ・ディベロッパー（FDer）研修を開催いたしました。

冒頭、関田一彦CETLセンター長より、FDer研修の趣旨説明として、本学でのFDの取り組みの現状について説明があり、研修の前提となる認識を確認しました。

中井俊樹教授、竹中喜一講師からは、FDの起源やその歴史、国内における動向や施策の意義、また具体的なFDイベントの企画・立案など広範な内容を、ワークを交えながらご講演いただきました。

学部教員の能力開発を、主体的に実施していく上で必要な視点や実践におけるティップスなど、様々な教育理論を基に理解を高めることができたことや、FDで対応可能な範囲の限界や、他の施策との有機的な連携の必要性、今後本学で推進するティーチング・ポートフォリオについての概要説明も行われ、参加者にとって多くの有益な情報が得られたことが伺えました。

愛媛大学　竹中喜一講師

学部のFDを担う19名（本学教員）の方に参加いただき、アンケートには、「ＦＤの意義と今後の自分の学部での使命が明確になりました。」「学部のFDの特徴や課題を振り返ることができ、今後の企画案も一緒に作成することができとても建設的でした。学部では知りえない他学部の取組を紹介してもらい、参考になりました。」等の声が寄せられました。

●カリキュラム・コーディネーター研修（Zoomによるオンライン開催）

前年9月につづき2022年1月22日・23日の2日間で、愛媛大学 教育・学習支援機構教育企画室の中井俊樹教授、竹中喜一講師にご担当いただき、カリキュラム・コーディネーター研修を開催いたしました。

冒頭、関田一彦CETLセンター長より、研修の趣旨説明として、本学での教員、事務職員が担う役割や、所属組織のカリキュラムを理解することの意義について説明があり、研修の前提となる認識を確認しました。

中井俊樹教授、竹中喜一講師からは、カリキュラム・コーディネーターが必要とされる背景、カリキュラムの特徴と課題、編成や評価の手法など、カリキュラムに関するPDCAをいかにして回していくかという、広範な内容を、ワークを交えながらご講演いただきました。

カリキュラム自体を認識、検討、改善していく視点に留まらず、それを実施するための組織体制や、構成員の特徴・行動原理なども含めた様々な教育理論を基に理解を高めることができたことや、実際に所属組織のカリキュラム改善を検討するワークなどを通じて、参加者には多くの有益な情報が得られたことが伺えました。

所属組織のカリキュラム検討を担う25名（本学教員、事務職員）の方に参加いただき、アンケートには、「学生のため、様々な変化に対応するために、カリキュラムマネジメントの重要性を理解して、関係者と協力をしていきたい。」「大変有意義な学びだった。 特にPDCAの評価・改善をいかに継続的におこなっていくかが重要であることを痛感した。他学部の方と意見交換できたこと、事務職員の方と長時間意見交換できる場もよかった。」等の声が寄せられました。

2021年度　TPメンター研修・学部説明会

CETLでは、全学的なTP（ティーチング・ポートフォリオ）の展開に向けて本年度下半期、メンター教員の研修および学部ごとの説明会を以下の日程で開催しました。

2021年11月25日（木）16時40分～17時半：第2回TPメンター研修
2021年10月29日（金）16時半～17時：文学部向けTP説明会
2021年12月21日（火）15時～16時：経済学部向けTP説明会
2022年3月11日（金）13時半～15時：看護学部向けTP説明会

学士課程教育機構　新任教職員紹介（2022年4月）

学士課程　講師……石橋　有紀
SPACe　助教……原岡　蓉子　　小田　玲子　　東風谷　太一
WLC　講師……マリ・クロマツ　　渡辺　哲子
WLC　助教……アリサ・モニカ・パデロン・マルゾニヤ
WLC　助教……リン・イ

創価大学
創価大学学士課程教育機構ニュースレター［SEED］第23号
発行日　2022年5月18日
発行者　創価大学学士課程教育機構
〒192-8577　東京都八王子市丹木町1-236
https://www.soka.ac.jp/seed/